

BOOK REVIEW

世界の調律

R. マリー・シェーファー 著 平凡社

東京に住みだしてから十年になんなんとしますが、実はまだ一度も元旦を東京で過ごしたことがありません。大通りをトラックの走らない東京の朝を一度味わいたいと思いますが、お上りの身にはなかなかかなわぬ望みのようです。

三田村鳶魚の「大江戸の春」（中公文庫「江戸の春秋」所収）によると、明治の十年代頃までは元日といっても庶民には見る物聞く物もなく、午過ぎ頃からは子供たちが揚げる凧の唸りの音、暮れ方になると注連飾りにあたる風の音がするくらいで、ほとんど何も音がしなかった、ということです。今や東京といわず、相当山深く分け入っても凧の唸る音の聞こえる場所があるでしょうか。それ一つをとっても、江戸・明治と現代との間にある文化の隔絶は象徴的にあらわれている気がします。

戸外でならともかく、部屋と外気をアルミサッシで仕切ってしまった今日、ほんの庭先の鳥の声さえテレビの音でかき消されてしまうのがせいぜいでしょう。鹿おどしや水琴窟といった我々の庭のもつ優れた音の文化が過去のものになっていくのは、単に嗜好の変化によるのではなく、家屋の構造を含めた社会と生活の全体にかかわる変化の現われなのです。

「サウンドスケープ」とは、サウンド（音）のランドスケープ（風景）という意味の造語ですが、このことを庭の中で考える時、問題はどうしても垣の内にとどまるわけにはいきません。耳には目でいえばまぶたにあたるものがなく、外界との行き来を完全に遮蔽することが困難だからです。聴覚ほど庭のある場所の属性に左右される感覚はありません。同時にこれほど移ろいやすいものもないでしょう。東京にある庭園の借景が高層ビルに奪われてしまったそのずっと以前に、せせらぎの音や虫の声はとうに奪われていなかったのでしょうか？

「サウンドスケープ・デザイナーの第一の職務は、聴き方を学ぶことである。」

まず部屋の戸を開けて、耳を澄ましてみて下さい。あなたの庭からは木の葉の葉ずれやコオロギの声、せせらぎの響きが聞こえるでしょうか。それらをさえぎる音は何の音でしょうか。また、好ましい音、好ましくない音はどんな音でしょうか。

部屋の中で「イヤー・クリーニング」を行ったら、次には庭に出て「音の散歩」を楽しんでみて下さい。あなたの靴の下で音をたてているのは、落ち葉でしょうか、霜柱でしょうか、それともグラベルでしょうか？

「私が提唱するサウンドスケープ・デザインとは何かを理解するには、世界のサウンドスケープをわれわれの周りで果てしなく展開していく巨大な音楽作品とみなすのが、最もよい方法である。われわれはその聴衆であると同時に演奏者であり、また作曲家でもある。」

我々は好むと好まざるとにかかわらず、いつも「世界の調律」に立ちあわすにいるわけにはいかないようです。しかしそれを意識しつつ、自らの手元に引き寄せることのできる人がどれほどいるでしょうか。庭はいつも私たちと外の世界との間に立つ仲介者です。世界を調律するために、これほどぴったりの実験室は他にないでしょう。